

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷十第

行發日一月一年九正大

論 說

温情主義と勞働問題……………法學博士 田島 錦治

手數料決定上の二問題……………法學博士 神戶 正雄

モリスの文明觀と藝術觀と勞働觀……………法學博士 河田 嗣郎

所帶統計概説(二完)……………法學博士 財部 靜治

キヤナンの富の概念に就きて(一)……………法學士 石川 興二

時事問題

智識階級の解散……………法學博士 戸田 海市

朝鮮の財政獨立に就て……………法學博士 小川 郷太郎

雜 錄

生活費の組織的研究の必要……………法學博士 山本美越乃

判任官生活の實狀……………法學士 汐見 三郎

獨逸大銀行の取引所仲立業に就きて……………法學士 大森 研造

我國に於ける新ブルジョア階級の成立(二完)……………圓 谷 弘

カンニンガム博士逝く……………法學士 本庄榮治郎

京都帝國大學經濟學會第一回講演會記事……………

して、實に痛歎措く能はざる所なり。

凡そ經濟史の研究が發達するに至りしは、最近十九世紀の中葉以後のことにしてその最も著しきは獨逸なりと雖、英國に於ても亦既に十八世紀の頃、Anderson 及び Eden が史料の蒐集に力めたることあり、十九世紀の三四十年代に至り Tooke 及び Newmarch の物價史(1738) Porter の Progress of the Nation (1736-1743) 等公にせらるゝに至りしが、その六十年代に至り Rogers の History of Agriculture and Prices, 1856. 一出てしが、この研究は必ずしも科學的に完全なるものなりとはいふを得ざるも、而も史的研究に入らむとする一新紀元を劃するに足るものたるを失はず。其後英國に於ては多少當時獨逸における歴史派の影響により、又英國自身における史的研究所の發達により一八二一—八四年には注意すべき三著述を見るに至れり。一は Toynbee, Lectures on the Industrial Revolution in England, 1884 二つ二は Cunningham, The Growth of English Industry and Commerce 1882. 三つ三は

カンニングガム博士逝く

本庄榮治郎

一

一九一九年九月發行の The Economic Journal (vol. XXIX. No. 115) は經濟史家ウィリアム・カンニングガム(William Cunningham)氏の訃音を傳ふ。英國に於ける有名なる經濟學者にして、且偉大なる人格者たる氏を亡ひしことは、實に英國のみならず一般斯學界における一大損失に

Seebold, *The English Village Community* 1883. 是れ也。Toynbee は最も傑出したる實際的歴史的研究家なりしが、不幸夭折したるは惜むべく、Seebold の著書は中世農業史の研究につき欠く可らざるものとす。而して右の Canningham の著は今日尙英國經濟史の全般に涉れる唯一の書といふも差支なきものにて、同書は再版に於て二卷に分ち、上卷は(1890)古代及中世、下卷は(1892)近世とし、一九〇三年の版に於て(下卷) (二册) その面目を一新し上卷は一九一〇年に下卷(二册) は一九一二年に五版を出だせり。氏は常に事實に基きて史論を立て、新事實の發見せらるゝ毎に其論を改めたることを少からず。實に氏は W. J. Ashley (*An Introduction to English Economic History and Theory*, 1st. ed. 1888) と共に英國經濟史における大家にして、この二氏出づるに及んで英國經濟史の研究は大に發達するに至り、從來の獨斷的研究を排して、經濟の發展を歴史的に討究するに至りしものなり。英國の經濟史に關しては、Ashley の著、最も良書なりと認め

らるゝも中世の終りまでに止まり、Rogers, Price, Meekith 等の著は未だ重要なる著書といふ可らず。獨りカニンガム氏の大著ありて、英國全體を通ずるの經濟史を知り得べきものとす。上述の所により氏の斯學界に於ける地位は略ぼ明かなるを得ん歟。(1)

二

カニンガム氏は一八四九年十二月十九日スコットランドのエヂンバラに生れ、長じて Edinburgh Academy, Edinburgh University に學び一八六九年には更に Cambridge の Trinity College に學び、屢々優秀なる成績を挙げしが 1874-78 には James Stuart によりて計畫せられたる University Extension に於ける講師の一人となり、一八八四—九一年には史學の講師たり。氏が London なる King's College の經濟學教授となりしは一八九一—九七年のことにして、ついで一八九九年には亞米利加に赴き Harvard University に於て經濟史を講じたり。氏は、Maitland, Ward 等と共に British Academy の original members の一

(1) Schmoller, *Grundriss*, I. S. 121
Ashley, *The Present Position of Political Economy in England*, p. 16-20
(Die Entwicklung der deutschen Volkswirtschaftslehre in 19. Jh. TL. I.)
Price, *The Position and Prospects of the Study of Economic History*, p. 6 et seq.

人にしてその創立には與つて力ありし所なり。
一八八七年 British Academy の Fellow に擧げられ、
又 Royal Economic Society の創立に盡力し、殊
に Cambridge Historical School の大なる發展に
は、氏の助力に俟ちし所多く、Cambridge の
Women's College についても力を致せし所多か
りき。曾て Cambridge 大學より D. D. (神學) Edin-
burgh 大學より D. Sc. (理學) 及び Hon. L. L. D.
(名譽法學) の學位を受けたり。

氏は晩年政治上にも力を致し National Party
(國民) に關係し、逝去に先つやや以前には Cam-
bridge 支部の首領に擧げられ、就任の際には、全
歐の狀況及びこれに對する英國の使命につき論
する所ありき。又氏は強硬なる關稅改革論者と
して、かの Chamberlain 支持者の一人なりしが、
而も彼れが有名なる經濟史家たることは、その
態度主張に千鈞の重みを加へたる所なりき。

一八七三年氏は僧籍に入り一八八〇—九一年
には Trinity College の禮拜堂牧師 (Chaplain) を
つとめ、一八八五年には Cambridge 大學の神學

講師となり、又一八八七—九二年には Cambridge
の Great St. Mary's 寺院の牧師 (Vicar) として
命名あり、一九〇六年には Ely の副僧正 (Arch-
deacon) に擧げられたるが、これ等宗教上の方面
に於ても氏は忘る可らざる人格者たりし也。一
九一九年六月十日を以て逝く數へ歳七十一歳な
り。

氏の名著 Western Civilisation, Growth of En-
glish Industry and Commerce 等の史料蒐集につ
き常に助力をなしたる Lilian Knowles 夫人は氏
の人を爲りを論じて曰く "Dr. Cunningham was
so vivid a personality that it is almost impossible
to realise that we shall see him no more. He
was so intensely, vitally alive, so interested in
everything that was going on, so keen a Chur-
chman, so great a scholar, so inspiring a teacher,
so good a friend." 也。②

三

終りに政治經濟社會學上に於ける氏の著書の
主なるものを擧ぐれば左の如し。

② The Economic Journal, Sep. 1919, pp. 382-393.
The Encyclopaedia Britannica, 11 th ed. vol. VII, pp. 633-634

- (1) The Growth of English Industry and Commerce 1882, (2) Politics and Economics 1885,
- (3) Political Economy treated as an Empirical Science 1887, (4) The Use and Abuse of Money 1891, (5) Outlines of English Industrial History 1895, (with Dr. E. A. Mc Arthur.) (6) Modern Civilisation in some of its Economic Aspects 1896, (7) Alien Immigrants to England 1897,
- (8) An Essay on Western Civilisation in its Economic aspect (Ancient Times, 1898, Mediaeval and Modern Times, 1900) (9) The Case against Free Trade 1910 & 1914, (10) Christianity and Economic Science 1914, (11) Christianity and Politics 1916, (12) English Influence on the United States 1916, (13) The Progress of Capitalism in England 1916.

尚詳細は「英國に於ける資本主義の發達」卷末の論著目録を見よ。右の目録に出づるものは主として政治經濟社會學上の論著にして、その數、百〇一を算す。神學上哲學上の研究については之を含まず。